【 12 】

氏　　名	中野秀一郎（なかの ひでいちろう）
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第124号
学位授与の日付	昭和53年3月23日
学位授与 要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**プロフェッションの研究**
論文調査委員	（主査）教授 池田義祐　教授 柿崎祐一　教授 本吉良治

論文内容の要旨

本論文は，主として職業社会学において「プロフェッション」（Profession）と呼ばれている職業カテゴリーを，より広い視野から解釈し直すことによって，その職能の全体社会に対する関係を再定式化し，従来，非体系的にしか考察されることのなかったプロフェッションの社会的性格と存在様態とを包括的な枠組の中で理論的・実証的に考察したものである。

論文全体の構成は，序章と終章とを含めて八章から成っている。先ず，序章「予備的考察」と第一章「プロフェッションの社会学」において，著者はプロフェッションを考察する著者独自の社会学的理論枠組（プロフェッションと，その外界とのインプット―アウトプット図式）と，それに基く主要な分析ポイントを明らかにしている。すなわち，職業社会学の成果を生産的に継承しつつ，さらにこれを全体社会システム論の俎上において普遍化し，現代社会とのかかわりのなかで現出するいくつかの主要な分析ポイント，特に国家（権力）の職能分化に伴って生ずるプロフェッションの在り方について述べ，次いでプロフェッションの職能に関する今日的変化に鑑み，クライアントの社会的拡がりを，いくつかの層（個人から国際社会まで）に区分し，プロフェッション・サービスの「生産領域」，「経営タイプ」，「機能的分化」及び「政治的志向」をクライアントレベルに組み合せることによって，包括的な理論的考察を試みている。

第二章から第六章までは，上述の如くプロフェッションを一つの社会的システムとして把握することによって，それが外界と対応する場合に展開する分化下位体系の四領域の分析に各一章ずつが与えられている。すなわち，第二章「補充と社会化」において，著者はプロフェッション・システムの第一の分化下位体系をメンバーの補充と社会化にかかわるものとして捉え，ここでこの社会層が相対的にではあるが一定の完結した閉鎖的な補充圏をもつ傾向，またそれが，例えば一般の産業労働者などの場合とは著しく異ったパターンを維持していることを明らかにしている。

第三章「労働とクライアント」では，著者はプロフェッション活動そのものの分析を試みているが，

その中心は労働の特性と対クライアント関係におかれている。一般に疎外論の範囲での労働分析によれば，「賃労働化」と「技術的専門化」（労働の細分化）が進行する度合に応じて，労働そのものが労働者の「生き甲斐」となる度合がますます低下するとされているが，プロフェッション活動は少くとも他の労働と比較して，こうした労働一般の変化の傾向から全く自由であるとは言い難いにもかかわらず，なおかつ「労働疎外」からは最も遠い労働形態であり，労働意識にもこうした特性を留め有っている。しかし，プロフェッション活動に特徴的な対クライアント関係の問題となると，そこでは伝統的に保持されてきたプロフェッションの権威が特に最近急速に崩れ落ちつつあり，それがクライアント側からの顕在的又は潜在的な告発とプロフェッションの側の自信喪失を招き，両者の間に緊張関係を現出せしめている一面を指摘している。

第四章「組織と自立」において，著者は現代社会の組織化の波が漸次労働の場に浸透し，組合主義を助長している一般的傾向の中で，プロフェッションの賃金労働者化の過程を通しての組織化も認められるが，しかし反面，職能集団の組織化がプロフェッションの自立性擁護の砦として機能する可能性が残されていることを論究し，職能集団の内部における統制とサンクションのメカニズムの問題を提起している。

第五章「政治とイデオロギー」では，「漸進的改良主義」の傾向がプロフェッションの下位文化に由来し，こうした政治的イデオロギーの特性は，それが直接的な形で下部構造的要因によって拘束されるものではないことを明らかにしている。一方又，本来，直接生産労働に携わらないために，プロフェッションの存在様態は，クライアント＝パトロンの意向にかかわるところ大であり，現代社会では大衆，大企業，国家などが一部のプロフェッションを雇用するという形態が一般化したため，ともすればプロフェッションの社会意識もまた，これらのクライアント＝パトロンの統制力によって拘束されるという傾向が生じていることを明らかにしている。

第六章「近代化と国際化」において，著者はプロフェッションと社会変動の関連について考察しているが，現代社会における変動の側面を「近代化」と「国際化」において捉え，それぞれの側面においてプロフェッションが果している役割りをマクロな視点から概説している。ここでは特に「国際化」（人的交流，頭脳流出，機能的国際機関など）の側面で詳細な記述が試みられている。

最後に終章において著者は，以上の六章にわたるプロフェッションに関する包括的，体系的な社会学的研究の総括を試み，本論文の独自性が従来までの職業社会学的分析，知識人論，科学や高等教育の社会学，さらには政治社会学におけるエリート研究まで包摂した「知識の人」に関する体系的アプローチにあることを述べ，且つ本論文が「プロフェッションの社会学」という新しい現代社会学の領域への第一歩であるにすぎないことを，またそれが必要な基本的作業であることを論じている。なお，第二章より第六章までの考察で，著者は自らが実施した専門的職業人としての医師及び大学教師についてのアンケート調査の結果を以って，各章において展開している理論を直接的に，又間接的に例証している。この点からすれば，本論文は，冒頭でも述べた如く，プロフェッションについての理論と実証の両面にわたる研究ともいえるが，中心となっているところは，あくまでも理論的研究であって，実証的研究は本論文においては補足的役割りを果しているにすぎない。

論文審査の結果の要旨

本論文の著者は，現代の産業化社会が基本的には近代科学の知識・技術を身につけた現代プロフェッションの活動に大きく依存している事実に着目し，これを社会学的な視角から体系的・包括的に研究せんと試みたものである。

A. M. カー-サンダースと P. A. ウィルソンが1933年に名著「プロフェッション」（A. M. Carr Saunders & P. A. Wilson, The Professions, Oxford Univ. Press）を刊行して以来，社会学においてなされたプロフェッションに関する研究は主として職業社会学のなかでなされており，そこで当然，プロフェッションを社会における職業体系中の一の職業形態として捉え，他の職業との比較などを通して，それの社会的特質や属性を明らかにするなど，終始職業としての側面に限定されている。なお職業社会学以外でも，産業社会学や知識社会学や政治社会学などの諸領域において若干の研究が散見されるが，それらはいずれも部分的，非体系的な研究の域を出ていない。

本論文の著者は，現代社会におけるプロフェッションを一の職業カテゴリーとして認めながらも（その点において職業社会学における既存の研究成果を積極的に取り入れている），それが現代の産業化社会において重要な役割りを演じている社会階層としてのプロフェッションの一側面であるにすぎないとして，プロフェッションそれ自体を中心とする独自の社会学研究の理論枠組を模索し，展開し，且つ自らの手で行った若干のケーススタディ（兵庫県下の二地域における医師と国立二大学及び私立一大学における大学教師に対するアンケート調査）に依って，その理論を例証しているのである。

著者が本論文で提唱しているプロフェッション研究の社会学的理論枠組は，(1)補充と社会化の領域，(2)労働とクライアントの領域，(3)組織と自立の領域，(4)政治とイデオロギーの領域の四領域の相互連関からなるプロフェッションの社会システムアプローチである。かかる枠組を用いてなされた著者の「プロフェッションの研究」のなかで，特色と認められる点の第一は，従来職業社会で実証されていた補充の問題の一としての職業の世代間移動について，わが国のプロフェッションの場合，家族という社会化装置が残存しているかぎり，世代間移動が著しく制約されており，従って補充層が相対的に限定されていることを明らかにした点である。

第二の点は，プロフェッションの労働特性をクライアントとの関係から分析していることである。すなわちプロフェッションの活動に関するかぎり，「労働疎外」よりもクライアントとの関係が重要であるとし，特にクライアントの多元化や集団化とクライアントからの積極的な働きかけ（最も積極的には社会運動の形をとる告発運動）などに見られる両者の間の緊張関係に着目したことである。

第三の点は，プロフェッションの組織化の問題を，一方においては官僚制化に伴う他律的組織化と他方においては職能集団としての自律的な組織化の二側面から捉え，後者においてプロフェッションの伝統的な基本的な特質である「自立性」が全体社会レベルでの巨大な組織化，管理体制化の趨勢のなかで，いかにして保持されうるかを国際的な視野から論じている点である。この点は多年，国際関係論を研究してきた著者の蘊蓄が発揮されている。

最後に本論文は，理論構成，理論的分析の厳密さ，精緻さに比して実証的側面での調査技術の未熟さ

が欠点として指摘される。特に著者自身の手になる資料の数量的処理，意識や態度調査の方法や結果の検定などについて今後の研鑽が望まれる。かかる欠点にもかかわらず，本論文によって著者は，現代社会において重要と考えられながら，体系的・組織的研究として殆んど未開拓の状態にある「プロフェッションの社会学」の領域に，一応の理論枠組を提供し，それに基いて組織的一般的考察をなした。この点，わが国におけるこの領域の先駆的業績として本論文を評価することができるであろう。

よって，本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。